

## — クリスマスプレゼントありがとうございました—

15号で報告させていただきましたように、皆様のご協力により、小学生を含めて500ドル送金いたしました。ハイスクール生徒の場合、今年のクリスマスプレゼントはお小遣いだったようです。以下は礼状の一部です。

クリスマスのご挨拶を申し上げます。…12月5日の朝、僕たちはランチ用にたくさん料理を作りました。お屋には、カーシューというお店でみんなでショッピング!プレゼントを買うものもあれば、自分の靴や服を買うものもありました。午後はゲームやバスケットなどで遊び、夜は民族音楽の夕べ。翌朝は、ミサの後プールに行きました。このように、二日間にわたるクリスマスパーティーを僕たちは心から楽しみました。

僕たちは皆様のご支援に心から感謝するとともに、いつも皆様に神の恵みが豊かでありますようにお祈りしています。学用品、授業料など、僕たちに対するご支援にもう一度心よりお礼申し上げます。

メリークリスマス! 幸多い新年を! 敬具

—ハイスクール3年・スペンサー・ブラと全学生より—



## — モロ女性リーダー・アガリン・サラさんの話を聞いて—

千葉県 / 橋本あき広

アガリンさんは、ミンダナオ島ゼネラルサントス市に住んでいるモロ族の女性リーダーの一人です(日本にも毎年長期滞在します)。彼女は1996年に栃木県西那須町にある「アジア農村指導者養成専門学校・アジア学院」に10ヶ月間留学しました。以下はそのときの自己紹介です。

「モロ女性センター・コミュニティワーカーで アガリン D.サラ (Agalyn D. Salah)

①ニックネーム: アガ ②家族: 夫 ③宗教: イスラム ④食べられないもの: 豚肉

活動内容: ミンダナオ島に住むモロ族の女性たちの自立援助。食料生産と周辺の生態を教えることを目的にしたモデル農場の運営。同じ目的をもつミンダナオ・キリスト教奉仕財団で働いています。」

アガさんの話をきいて、モロ族は権力には敢然と立ち向かい、事に当たるときは一致協力する民族であると感じました。貧困からの脱出、生活向上のため、いまゼネラルサントスでは協同組合をつくって自立への施策をすすめています。日本的感覚からすれば、協同組合を作るなど簡単だと思うかもしれませんが、現地の人たちはそのような意識が低く、そのうえリーダー不足です。未発達な地域ほどリーダーを必要とするのです。

各種施策の中でアガさんは、農業、手工芸品の振興、教育の3つに重点を置いています。

農業は1種類のみでなく多品種の栽培と家畜飼育をおこなっています。気候や相場変動、そして家畜の伝染病などの被害を少なくする危険分散の考え方で、これを彼女はアジア学院で学びました。

内戦と迫害によってゼネラルサントスに流れ込んできた難民を指導し、その人たちがアガさんを中心にして一致協力して働いている。私はモロ族のエネルギーを感じました。教育については、今大学生3人に奨学金を出しています。卒業したら地域に戻って働くことになります。ここでも奨学金の不足が悩みの種です。

話は遡りますが、内戦と迫害で女・子供の難民がゼネラルサントスに逃げ込んできた時にアガさんは16歳。この難民をどうしたら救えるか、生活できるようにするにはどうしたらいいか 結局、言葉、読み書き、計算を教えることにしました。これが出来れば商店でも働くことができ、職域が広がるからです。アガさんが先生役を務めたそうです。

現在のゼネラルサントスは、ミンダナオ活性化のためにフィリピン政府の出資、外資の導入(日本からの投資・開発援助も多い)による開発がすすみ、それに伴う地域住民の立ち退き強制などの問題も起きていて、アガさんたちは全面的に反対しています。

最後に、アガさんの話のなかで、私としても考えさせられた2点をあげさせていただきました。(次頁)